

プリオン病剖検と標本作製について

Autopsy techniques of prion diseases

田野 光敏¹, 田村未来¹, 諏訪部 桂¹, 高尾 昌樹^{1,2}, 美原 盤¹

1. 公益財団法人脳血管研究所 美原記念病院

2. 埼玉医科大学国際医療センター 脳卒中内科・神経内科

【はじめに】

当施設は2007年から美原記念病院ブレインバンクを整備し、特にプリオン病の剖検は依頼剖検を含め48例を行っている。剖検方法、及び標本作成の注意点に関して、技師の立場から報告する。

【剖検】

剖検は、プリオン病剖検・病理検査ガイドライン2008、プリオン病の安全な剖検と病理検査のために、クロイツフェルト・ヤコブ病診療マニュアル〔改訂版〕をもとに実施している。剖検は医師1名と最低でも監視者（技師）の2名で行う。技師は汚染が拡大しないように注意して、手袋も2重に装着し、汚染が懸念された場合には直ちに交換する。遺体の剖検後の切創は3%次亜塩素酸ナトリウムで消毒する。頭部は消毒後シャワーキャップを2重に被せることで感染源の流出を防ぎ、その上よりニット帽を被せておく。作業中は吸水シートを2枚重ねて敷き、消毒後に汚染されたシートを廃棄し、清潔なシートに替えて再び汚染されないよう注意する。エンゼルケア後、遺体は収納内袋と遺体収納袋の2重の袋に収納し、葬儀会社もしくは遺族に返却する。その際、遺体の取り扱いに関する注意点をまとめた紙を渡し収納袋から出さないように説明している。

【組織の蟻酸処理】

切出しにおいても剖検と同様に汚染の拡大に注意し2名で行う。切出し後の組織に関しては98%蟻酸にて浸漬攪拌を1時間行い、感染性を失活させた後、一晚流水にて水洗する。以降は組織に感染性がないものとして扱う。

【標本作製】

プリオン病の組織は染色時に剥がれやすいので剥離防止コートスライドグラスにて拾い上げて一晚乾燥後、ベーキングを行い剥離防止している。免疫染色として3F4抗体(Covance)を中心に自動免疫染色装置(ベンタナXTシステム:ロシュ)にて染色している。

【結語】

プリオン病の剖検は、適切な方法で施行すれば、どのような施設でも可能である。